

# パラケルススと空海

## ——生命観をめぐって——

小田川 方子

昨今の世界的規模の異常気象や各地の天災は、近代、とくに産業革命以後、自然支配と自然破壊の上に築かれてきた人類の文明に対する自然の反逆ではなからうか。われわれは、かかる文明の在り方自体を転換し、自然と人間を調和的なつながりにおいて捉える必要性を痛感する。しかし他方われわれは、自然的生命は死と必然的に結合しているという冷徹な事実を無視することはできない。ここからわれわれは、自然的な生と死を超えた永遠の霊的生命への憧憬の念を抱かざるを得ない。本論では、自然と人間および霊の世界を包括する有機的にして調和的な生命観を求めて、ルネサンス期の医師にして自然哲学者であり、かつ神学者であったパラケルスス (1493-1541) と、わが国最初の体系的仏教の確立者である空海 (774-835) とを扱ってみたい。

### 1 パラケルススの生命観

#### i 宇宙論

自然的世界(ないし宇宙または万物)は神の創造の働きによって始まる。創造の最初は、この世界の原質料 *Urmatèrie* であり、それは、すべての事物を未分化の状態で内に含んでおり、それが外部へ向かって自己外化し、自己展開したものが、この世界に外ならない。かかる原質料はイリアステル *Yliaster* (イリアドゥス、イレク) とかカオスと呼ばれ、いわばマトリクス *Matrix* (子宮) であり、その中から次々と、諸元素、大宇宙および個々の被造物が生みだされる。こうした根源的な形成力を有するイリアステルは「生命の精気」 *spiritus vitae* と考えられ、この世界の一切のものは、有機的なものであれ、一見、無生物と見えるも

のであれ、イリアステルから生みだされたものとして、その生命力に与っているのである。

イリアステルから生ずる最初のものである諸元素は、伝統的には火、水、風、土とされた四元素であるが、この内の「火」は、パラケルススによって「天空」Firmamentと置き換えられ、「土」ないし「大地」が植物の果実をもたらすように、星々という果実をもたらすとされる。「水」は金属や石などの実をつける。「風」とは「空気」であり、かつ「呼吸」であり、生命を維持するものとして、他の三元素に先行するものである。したがってこれら四元素は、物質の形成原理としての原物質であることを超えて、力動的な生命であり、その力が現れ出したものが可視的な元素であると理解される。

かかる四つの生命領域の中で、とくに天空は重要視され、「星辰」astrumとも呼ばれて、それ自身は目にみえず、触れ得ないものとされ、それが世界の目に見え、触れられる物的部分の背後にあり、それを導き支配しているといわれる。われわれが見ているのは、いわば宇宙の「身体」Corpusであり、そこに住まい、それを導いているのは、世界の「魂」としての「星辰」である。<sup>(5)</sup> このように全世界は、上と下、内と外、見えないものと見えるものが階層的に秩序づけられ、一つの生命の精気によって貫かれ、統合されているのである。

こうした階層的秩序をなすものは、それぞれ相互に、あらゆる

点で類推的に、一致対応する、すなわち「整合」Concordanzを有する。上方の天上界は、下方の地上界、物体界に、可視的な表現をもって現れ出るのである。

## ii 人間論

以上のような宇宙に対して、人間は、それと関係しつつも、特別な地位を占める。人間は二重に、二度にわたって創造された。人間の第一の創造者は、父なる神であり、人間を下から、「地のリンプス」(土の塵) limbus (limus) terra から人間を創り出し、これに第二の創造者としての神の子キリストが、上から神の霊を吹き込んだ。リンプスとは、人間の原質料ないし第一物質であり、「地」とどまらず、世界ないし宇宙の全体である。<sup>(6)</sup> それから人間は、神の霊を刻印されたのである。

ところで人間は、古代ギリシャ以来、身体、魂、霊(精神)の三部分から構成されていると考えられている。パラケルススによれば、二度にわたる創造のうち、神の似像を刻印された人間とは、人間の霊の部分である。それに対して、この世界から創られた部分が、人間の身体と魂である。この世界ないし宇宙と人間との対応関係、即ち「整合」を示すのが、「マクロコスモス—ミクロコスモス」説である。人間は、「ミクロコスモス」(小宇宙)であり、縮小された「マクロコスモス」(大宇宙)である。マクロコスモスの構成要素である四元素との関係でいえば、人間の肉と骨は「地」に対応し、血液は「水」に対応する。それに対して「空

氣」と「火」は、人間の内にある非物質的にして捉えることのできないものとしての個体的生命力「バルザム」Balsamと体温とに対応する。<sup>7)</sup>

バラケルスの晩年の最も包括的な書物である『大天文学ないし全鋭利哲学』Astronomia magna oder die ganze Philosophia sagax (1537/38) では、この人間の内にある捉えることのできないものを、人間の第二の身体として、「星辰の身体」(der astralische Leib)と名づける。<sup>8)</sup>その背景には、魂は生前と死後は、星界に留まるといふ古代の信仰がある。それはまた、「天上的身体」der himmlische Leibとも呼ばれる。つまり、人間の魂は、天ないし星辰に由来するともいえるような、ある力、「磁力」Magnetを内に秘めており、<sup>9)</sup>それが目に見えない身体性を有すると考えられるのである。<sup>10)</sup>

### iii 神学

この星辰の身体は、目に見えないものであるにもかかわらず、第一の可視的な身体と同じく、死すべきものである。なぜなら、神による世界の創造の始めがあるように、世界の終わりがあるからである。「世界年」Weltjahrが終わるとき、四元素をはじめとして、目に見える、また見えない、宇宙ないし世界の一切は、それらが生まれ出した元のもの、すなわちイリアステルのなかへ戻るのである。<sup>11)</sup>

しかし、すでに見たように、人間は「地のリングス」からのみ

でなく、神の霊によって創られたものである。神の霊は、人間に「生命の息」spiraculum vitaeを通じて吹き込まれた。それは、地のリンプス(リームス)との対比で、「天のリームス」Himmels Colonnとも呼ばれている。<sup>12)</sup>これによって、人間は、神の永遠の生命に与ることができ、そして、「地からあるものは、再び地のなかへ行き、天から来たものは、再び天のなかへ行く」<sup>13)</sup>。すなわち、自然的世界から来たものは、そこにおいて死に、神から来たものは、神のもとへ行くのである。

永遠の生命とは、だが、バラケルスにとって、プラトン主義的な純粹に精神的なものではない。それは、キリストの復活に示されるところの、永遠の身体と結合したものである。人間に新しい血と肉を与えた神の子キリストに与えることによって、人間は不死の肉と血をもって天へ行くことができる。

ところで、キリストをキリストたらしめたのは、神の霊である聖霊の力である。聖霊によってキリストは、アダムからの死すべき肉の代わりに、永遠の生きた肉をもたらし、聖霊こそが、永遠の生命を与えるものとして、靈的な肉と血とを人間にもたらし、このことを実現化する最初の宗教的儀式が、「洗礼」Taufeに外ならない。洗礼においてわれわれは、キリストに現れた聖霊から受肉し、新たに生まれることができる。そして、「われわれが(聖)霊から受け取るその肉において、われわれはわれわれの救い主であるキリストを見るであろう。そしてその

〈生きた肉〉 das lebendige Fleisch をもつてわれわれは復活し、神の国へ入るであらう<sup>(14)</sup>。この「生きた肉」を備えた永遠の身体は、死すべき自然的身体に対して、靈的身体ないし復活の身体とも呼ばれる。このように、バラケルススにおける永遠の生命は、人間において、靈と身体が一体的に栄光化されることによって現れ出るのである。

## 2 空海の生命観

空海においては、自然ないし宇宙は、それ自体独立して扱われることはない。空海のもっとも体系的な書物である『十住心論』の中では、最初の段階である愚者凡夫の「羶羊心」は、無明におおわれており、善悪の因果を知らないために、業にしたがい報を受けて、輪廻転生するとされるが、かれらの五つの存在の在り方つまり地獄、餓鬼、畜生、人および阿修羅という「五趣」が住するところが「器界」、すなわち自然的環境世界と考えられている。器界が生ずるのは、「五輪」ないし「五大」と呼ばれる地、水、火、風、空によってである。まずもつとも下にある「虚空（空輪）に依止して風輪生ず<sup>(15)</sup>」。続いてその上に水輪が生じ、「風輪によりて住す<sup>(16)</sup>」。さらに「金（地）輪」が生じ、「水輪によりて住す<sup>(17)</sup>」。これら四大に対して、「火大は……遍く四輪の辺に満てり<sup>(18)</sup>」。こうした五輪は、何によって生ずるのかといえは、「衆生の業のしからしむるところなり<sup>(19)</sup>」といわれる。すなわち、無始以来の生

きとし生けるものの無明の業の力が、器界の元の五輪を生ぜしめており、その器界にまたかれら自身が住んでいるのである。このように、自然界と、人間を含むものもろの生命あるものは、相関的のつながりにおいて存在しているのである。

しかし、このような器界および五大の理解は、空海によれば、顕教、つまり一般的な仏教の立場からのものである。空海自身の真言密教の視点からの理解は、かれの思想の核心が集約的に示されている書『即身成仏義』において辿ることができる。ここでは最初に、「六大」について、「六大とは五大とおよび識となり<sup>(20)</sup>」といわれる。それは、あらゆるもののありのままの、真のすがたの悟りとその境界であり、六大の意味として、『大日経』の次のことばが引かれる。「我れ本不生を覚り、語言の道を出過し、諸過解説することを得、因縁を遠離せり、空は虚空に等しいと知る。」この文の「本不生」から「虚空」までの五つの特性は、五大のそれぞれに対応させられ、また「我れ……覚り」は「識大」を表すものとされる。

このように理解された五大は、従来のような原物質であることを超えて、それらの物質性がいわば精神的な普遍性へと透明化されたものである。したがって、「四大等、心大を離れず、心色異なりといえども、その性すなわち同なり。色すなわち心、心すなわち色、無障無礙なり。」このように、心大、つまり究極の悟りの心と融通無礙になった四大ないし五大は、悟りの身体の面であ

り、ここに心身が一体化した宇宙的、根源的な「法界体性所成の身」、真理そのものの本性を表現した心身が、六大として示されている。

かかる六大は、ありとあらゆるもの、すなわち「一切の仏および一切衆生器界等」を生ぜしめる、つまり「能生」である。この点から、六大は、もともと根源的な生命そのものであるといえよう。それを象徴的に表現すれば、「胎藏界」、つまり母の胎内のように、万物を生み出す元であり、すべてを包含し、養育する。それに対して、生ぜしめられる、「所生」のものは、上は諸仏のさまざまな在り方から、下は「六道」つまり地獄から天に至る衆生の六つの在り方まで、またこれらの住む世界も全部含むものである。こうした「能生」と「所生」の区別はあるが、しかしそれらの究極的な真理の相においては、「すべて能所を絶せり」といわれる。なぜなら、「法爾の道理に何の造作かあらん」、すなわちあるがままのことわりによるものであり、造るとか生ぜしめるなどの意図的な働きはないからである。

したがって、「即身成仏」の頃の最初に「六大無礙にして常に瑜伽なり」といわれる。その解説として、「無礙とは互相に渉入自在の義なり」、「瑜伽とは翻じて相応」とされ、両者とも「即の義」であるとされる。すなわち能生の六大も、所生の一切も、互いに自由自在に貫入しあい、それらの本来的な同一性、「即」、を常に有している。このような六大に基づいて、個々の修

行者は、「父母所生」のこの身に、この肉身のまま、「成仏」することができるといえる。そのための修行法として、空海は、『大日経』の次のことばを引く。「真言者円壇を、まず自体に置き、足より臍に至るまで、大金剛輪を成し、これより心（むね）に至るまで、まさに水輪を思惟すべし。水輪の上に火輪があり、火輪の上に風輪あり。」そして、真言者たる修行者が心大に、足から臍までが金剛輪つまり地大に、等、身体の五箇所に五大のそれぞれが対応すると瞑想するのである。さらに、六大を人格的に「仏」として捉え、身体、言葉、心の秘密の働き（「三密」）を有する仏の力が、同じく三密を行ずる修行者に現れ、修行者よくそれを感じるといふ「加持」により、わが身と仏身と衆生身が円融無礙にして、「不同にして同なり、不異にして異なり」という境地を表現できるのである。

### 3 パラケルススと空海の生命観の比較

以上のようなパラケルススと空海の生命観を相互に関連づけて理解するとどのようなであろうか。まず両者の共通点として、つぎの諸点が挙げられるであろう。第一に、両者において、ありとあらゆるもの、いのちあるものも、一見、無生物と見えるものも、すべてもともと究極的な一なるもの——「神」および「六大」なしいその人格的顕現としての大日如来——のもとに包摂される。第二に、この究極的なものは、——パラケルススにおいては、

自然に対しては「イリアステル」を媒介にしつつ——すべてのものにいのちを与えるいわば母胎であり、生命の根源者である。第三に、この根源者から生み出された一切のものは、相互に、または根源者に対して、内的なつながり、ないし対応関係を有する。

この関係を示すものが、マクロコスモスとミクロコスモスの類比であり、それはバラケルススにおいてはとくに自然と人間との間に、また空海では六大と自己の心身との間に、成立するものとされる。第四に、両者の生命観は、有限的な生命において営まれるこの現実世界を含みつつも、生死を超えた永遠の生命への志向を有し、それのみずからの心身における実現化の道を示している。

第五に、東西の伝統的思想における対立的諸概念、たとえば物質と心、身体と精神、此岸と彼岸などは、両者において力動的に統一される。すなわち、両者の生命観は、対立する両項を、対立にとどめず、また否定し去ることなく、それらの妥当性を認めたとうえで、それらの限界をより高次元において超えて、すべての生命の相を包括する調和的な思想である。

これに対して、両者の生命観の相違は、以下のような諸点と考えられる。まず第一に、生命ある一切のものの区別ないし文飾化の違いである。バラケルススでは、自然ないし宇宙と、人間と、神という区別であるのに対し、空海では動物以外の自然界と、動物や人間を含むところの、地獄から天にいたる「六趣」と、悟りの諸段階との区別である。第二に、バラケルススにおいては、こ

れらの区別が存在論的に、実在するものとみなされるのに対し、空海においては、主体者の心身の境位に応じて、かれに現れた世界に住むという一種の現象学的区別である。第三に、これと関係するが、万物の始めと終わりは、バラケルススにおいては世界の創造と「死」として、神によって定められたものである<sup>21)</sup>。すなわち、存在論的現実性を有する。それに対して、空海においては、六大による万物の「能性」を一応認めながらも、同時に「法爾の道理」によるとして、創造の働きは否定される。また死、ないし死と結合した生は、主体者の「無明」のある限り、輪廻転生として無限に繰り返されると考えられ、主体者の心身の在り方に依存するものとされる。第四に、このような基本的相違に基づいて成立する生命観は、バラケルススにおいては、神的生命を頂点とし、それに与る人間の靈化された身体を伴う靈的生命があり、その下に人間の自然的生命として星辰の身体を伴う魂と元素的身体とがあり、それと重なり合いつつ大自然の生命がある。こうした重層的な立体的構造に対し、空海においては、ありとあらゆる生命あるものおよび環境世界は、究極の悟りに達し、「自心の源底を寛知し<sup>22)</sup>」た立場からは、すべてが本来的の同一性を有するものとして、「即」に貫かれたものとして、現成するのである。

(1) バラケルススと空海のそれぞれの思想史的位置については、論者による「西洋思想と仏教思想における生命観」(渡辺二郎編著、現

- 代文明と人間」理想社、一九九四年、二七—五二ページ）参照。
- (2) パラケルススの著作は、だいたいの次の版に於て、"Theophrast v. Hohenheim, gen. Paracelsus. Sämtliche Werke", hrsg. v. Karl Sudhoff. 以下は、"卷之Vの数字のあとに書名を記す"。
- 13, 131. Liber meteorum.
- (3) 3, 404 f. De mineralibus.
- (4) 13, 16. Philosophia de generationibus et fructibus quatuor elementorum.
- (5) マレトサントル・コイレ著 鶴岡賀雄訳『パラケルススとその周辺』一九八七年、章句風の番付、一二四—一三〇ページ参照。
- (6) 4, 467 f. De modo pharmaceutici.
- (7) 10, 649. Ein mantischer Entwurf.
- (8) "Astronomia magna oder die ganze Philosophia sagax der grossen und kleinen Welt" (=Theophrastus Paracelsus Werke, Bd. III, besorgt v. Will-Erich Peuckert), 1967, Darmstadt S. 72, 85, 91.
- (9) K・ゴルトブナー著 柴田・榎木訳『パラケルスス、自然と啓示』みすず書房、一九八六年、六三—一〇二ページ。
- (10) Paracelsus. Die Geheimnisse. Ein Lesebuch aus seinen Schriften, mit Einleitung und Kommentar von Well-Erich Peuckert, 1990, München, S. 155.
- (11) 13, 9. Quatuor element.
- (12) Philosophia sagax, S. 309.
- (13) Ebd. S. 306.
- (14) Ebd. S. 329.
- (15) 『秘密曼荼羅十住心論』(勝又俊教編修『弘法大師著作全集』第一卷) 山喜房仏書林、一九八八年、二二—二一ページ。
- (16) 同。
- (17) 一一三—一三六ページ。
- (18) 一一一—一三〇ページ。
- (19) 一一一—一三〇ページ。
- (20) 『即身成仏義』(全集第一卷) 四一—一三〇ページ。
- (21) 13, 9. Quatuor element. Vgl. Paracelsus. Die Geheimnisse, S. 124 ff.
- (22) 『十住心論』五五—一〇二ページ。  
(おたがわ・キウジ) 哲学・比較思想、麗澤大学教授)